HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『動物殺しの民族誌』 シンジルト，奥野克巳［編］（昭和堂,2016年,374項,5,800円）
Author(s)	大舘, 大學
Description	書評
Citation	哺乳類科学, 57(1), 169-171
Issue Date	2017-07-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66775
Type	article
File Information	201707261540.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

哺乳類科学　57(1)：167–171，2017
©日本哺乳類学会

書　評

『動物殺しの民族誌』
シンジルト，奥野克巳［編］
（昭和堂，2016年，374項，5,800円）

本書は，科研費・基盤A「動物殺しの比較民族誌的研究」（代表：奥野克巳）の研究プロジェクトの成果の一部として編まれたもので，食料や儀礼のために家畜や野生動物を殺す行為を文化人類学的に解釈することを目的としている．研究のために数多くの哺乳動物を「殺している」我々哺乳類学者の行為が人間社会においてどのように位置づけられるのかを，客観的に思考する良い機会であると思い本書を紹介させていただいた．

本書の寄稿者は9名で，扱っている内容や対象動物や地域は多様である．本書は3部構成で，各部にそれぞれ3章を含むので，合計9つの論文が収録されている．第I部「動物殺しの政治学」は動物の殺し方が社会問題となる政治的状況を，第II部「動物殺しの倫理学」はミクロな社会文脈の中で動物を殺す方法を規定する倫理を，第III部「動物殺しの系譜学」は動物殺しのあり方が他の文化との接触によりどのように変遷したか，という課題を扱っている．

第I部では家畜の屠殺（屠畜）と人殺しの両方が扱われている．第1章（花渕馨也）では，屠畜法と社会との関係が論じられている．イスラム教やユダヤ教では戒律にしたがって屠殺が行われ，家畜の意識があるうちに喉を切断し放血させて殺す．この行為は西洋社会では残酷

とされている．一方，ヒットラーによるユダヤ人のジェノサイドの際の処刑はこのような「残酷」な殺し方ではなく，ガス室によって処刑者の意識を無くしてから死に至らしめるという「人道的配慮」が行われた，という．現代の西欧社会では原住のヨーロッパ系の人とイスラム教徒の移民の軋轢が深刻になっているが，その原因の一つは「残酷な」屠殺法による食肉の流通であるという．残酷の定義の違いは社会の分断をもたらしている．第2章（池田光穂）では，動物殺しというよりも，人間の老人の遺棄と子殺しといった殺人の意味を扱っている．著者は人殺しを通して動物殺しの意義を論じており，逆説的なスタンスが興味をそそる．第3章（田川　玄）ではエチオピアのボラナ部族における，抗争による敵の殺害と大型哺乳類の狩猟・屠殺の関係について論じられている．ボラナの男性にとって人間や動物を殺すことは，男性性の象徴として期待されている．さらには女性による嬰児の遺棄は単に人口抑制だけでなく独特な社会的制度の維持のために行われている．

第II部では，先住民の狩猟に関する事例が述べられている．第4章（山口未花子）では，カナダ先住民のカスカにおける，狩猟される動物とそれに対する人の儀礼や感情との関連についての研究例が示されている．カスカにとって野生動物の肉や皮革の確保のための狩猟は，自家消費や現金の収入源として重要な生業である．本章では，狩猟する動物の種類によって，行われる儀礼や取り扱いが異なる原因について考察されている．第5章（近藤　宏）では，中米パナマの先住民エンベラの狩猟と毒蛇殺しを中心に，動物殺しがどのような心理的背景をもってなされているかが研究されている．エンベラは狩猟鳥獣や家畜は食べるために殺すのであるが，毒蛇やジャガー（家畜の加害獣）は実害や心理的・宗教的災厄を避けるために殺される．そして彼らは決して後者を食べることはなく，扱いも狩猟鳥獣とは異なる．第6章（奥野克巳）では，マレーシアのボルネオ島の先住民プナンの狩猟についての事例が紹介されている．プナンにとって野生鳥獣は重要な食料源であり，狩猟はもっとも関心のあることである．それ故に，マジカルな情報も含むあらゆる環境情報を統合して狩猟を行う．また現代では，人工的環境である油ヤシのプランテーションを利用してヒゲイノシシ（*Sus barbatus*）の狩猟が巧妙に行われている．さらに，この油ヤシの実を好む3種のヤマアラシ類（*Hystrix brachyura*：原著では種小名が誤表記，*Hystrix crassispinis*，*Trichys fasciculata*：原著では種小名が誤表記）の胃石は漢方薬として高価に換金できるので，最近ではヤマアラシを目当てに油ヤシのプランテーションにおける狩猟が盛んになっている．環境と社会の変化に合わせて，プナンは狩猟を生業として続けている．

第III部では，各社会における供犠（くぎ），狩猟や屠畜の歴史的な変遷が述べられている．第7章（山田仁史）では，世界各地の家畜や野生動物の供犠の歴史が総説されている．現代欧米社会では供犠に動物を供することは残酷と見なされている．このため欧米社会はイスラムの犠牲祭を残酷視する．ここでも動物殺しをめぐる価値観の対立が問題とされている．第8章（近藤祉秋）では，アラスカの先住民アサバスカの狩猟と漁撈についての事例が報告されている．アラスカでは「白人の」消費経済や文化が先住民社会に押し寄せ，先住民の伝統を忘れている世代が増えている．村評議会や学校は先住民の子供の学習意欲の向上を狙い，先住民の伝統文化や狩猟・採集法などを学ぶ文化プログラムを企画した．ところが，元々の意図とは異なり，先住民側ではこの文化プログラムを「白人の食べ物が来なくなる日」に備える先住民文化の再教育の場と捉えている．しかし，その伝統文化さえも白人との接触により比較的近年に成立したものもある（たとえば鮭捕獲水車）．このようにアサバスカでは，他文化との相互作用から新たな伝統文化が新たな方法で継承されている．第9章（シンジルト）では中国西部に居住する牧畜民オイラト人社会における3つの異なる屠畜法について考察されている．オイラト人はモンゴル系の一派で，中国西部，モンゴル国西部，キルギスタンからロシア東部と広くパッチ状に分布している．彼らの宗教は，オイラトの在来のアニミズム，チベット仏教，イスラム教と多様である．屠畜法も宗教とも関連して3つの方法がある．オイラト本来の屠殺法は，腹を小さく割きそこから手を入れて心臓の動脈を指で切断するモンゴル式の方法である．一方，イスラム教徒は，家畜の喉を血管や気管ごとナイフで掻き切り放血させて屠る．そしてチベット文化圏では家畜を窒息させる屠殺法も行なわれる．中国青海省のオイラト人の居住地域にはこれら3つの屠殺法が併存している．仏教徒のオイラト人にとっては，イスラム式の屠殺法は残酷である上に，血が抜けて味が薄くなり美味しくないという．一方，モンゴル式やチベット式の屠殺法では血液は体内と肉に残り，美味しい肉が得られるとされる．このような理由から非イスラム教徒のオイラト人はイスラム式に屠られた肉を嫌う．さらに敬虔な仏教徒のオイラト人は，モンゴル式の屠殺法も残酷であり，窒息による殺し方がもっとも動物に優しい屠殺法だという．一方で彼らの一部は，チベット式はイスラム式やモンゴル式屠殺法よりも死ぬまでの時間がかかり，家畜の苦痛を伸ばしているとも考えている．

結局，チベット式屠殺法を奨励するオイラト人は動物に優しい殺し方というよりも，美味しい肉を得ることを最大の理由としている．

以上，本書を俯瞰すると，動物を殺す方法が，「残酷」か「優しい」か，という基準は所属する集団の違い（生業，宗教，社会システムなど）によって大きく異なることがわかる．さらには「残酷」や「優しい」という感情を超越して，動物殺しや人殺しは，その集団の文化や社会制度を維持するために行われることもある．そして同じ社会でも，「殺し」の倫理基準も時代とともに変遷してくることも示された．

以下では，本書から読み取った「動物殺し」の問題を日本の哺乳類学の活動に関連づけた私見を述べる．本書で紹介された人間による動物の屠殺に対する感情や価値観の問題は，学会の規定したガイドラインに従い対象動物を取り扱い・殺さなくてはならない哺乳類学者の研究活動とまったく同根な問題である．欧米の科学雑誌では，彼らの価値観に基づいた動物の取り扱いのガイドラインをクリアした論文でないと掲載してくれないし，引用もされない．従って，我々が独自にガイドラインをつくっても，それが欧米の価値観に従っていないと，論文を発表しても影響力のある欧米の雑誌で引用されないという事態に出くわすことになる．「たかが欧米の価値観」だけでは済まされないのである．このような理由から，日本哺乳類学会が制定したガイドラインも，欧米の価値観に準じたものになっている．さて，本書の第７章「動物殺しの言説史」は，「感情に流されるのではなく，過度に理詰めで人間の倫理を動植物へと拡張するのでもなく，人類史と動物殺しの言説史を冷静に見つめ直すことから，バランスある未来が開けるように期待したい．」との提言で締められている．つまり「動物殺し」に普遍的な倫理はなく，各々の文化のバランスを取るのが異文化共存において重要であることが示唆されている．非欧米人である日本の哺乳類学者は，動物の取り扱いを欧米人よりも中立的に捉えることができる潜在性をもっている．今後の哺乳類学の発展のために，動物の取り扱いを巡り，日本人研究者が世界に向けてより生産的な提言をすることを期待したい．

最後に，本書でもっと私が気になった点について述べたい．本書を通じて「動物殺し」と「殺害」という用語が多用されているが，この概念には屠畜や狩猟，研究による捕殺も含まれている．この用語は，本書の英語の副題にある「killing animals」に相当する言葉だと思われ，中立的な意味で動物を殺すことを意図していると思われる．しかし，いずれの用語にもネガティブなイメージが私の脳裏には浮かぶ．「動物殺し」はまだ中立的な言葉であるが，「殺害」に至っては積極的に「害」を及ぼす意思がある印象を受ける．少なくとも哺乳類学者は，悪意をもって動物を殺す場合以外は「殺害」という言葉は使わないだろう．さらに語源的に「殺害」という言葉は「人を殺すこと」を意味する（大辞泉）ので，この言葉を動物に適用するのは不適切であるかもしれない．哺乳類学研究者なら，野生動物の研究や狩猟に伴う「殺し」に対しては「捕殺」，家畜に対しては「屠殺（屠畜）」，実験動物なら「安楽死処置」や「安楽殺」を使うことであろう（安楽という言葉も研究者の願望が含まれている）．仮に日本の文化人類学では，中立的な意味で動物を殺すことに対して「殺害」という用語を使うのが慣例だとしたら，このこと自体，文化人類学的に研究するに値する事例であろう．

大舘大學（北海道大学低温科学研究所）
✉ohdaigaku@ezweb.ne.jp